

徳島県立近代美術館企画交流室長  
森 芳功 の



美術館の時間  
はロイヤル  
です

# 美術をたのしむ、美術館をたのしむ

## その88 西洋絵画の名品展

### 多彩な感想

徳島県立近代美術館では、「美の饗宴 西洋絵画の300年」展を開催中です(担当…吉原美恵子上席学芸員、江川佳秀学芸調査課長)。先月号でもご案内したように、バロック、ロココからエコールドパリまで、三〇〇年間のヨーロッパ絵画の流れを展示しています。連日たくさんのお客さまが来館し、五月二〇日には入場者が二万人を超えました。六月二日の最終日まで、さらに多くのお客さまに観ていただけるよう、関係者が努力しているところです。

前回も触れましたが、今回の展覧会は、徳島新聞社と県教育委員会による文化の森25周年記念実行委員会によるもので、徳島新聞社が広報に力を入れて、これも人気を盛り上げる理由となっています。

当館で数百年にわたるヨーロッパ絵画の歴史を紹介するのは久しぶりのことです。お客さまからはいろいろな感想や意見をいただきます。それがまた興味深いのです。

「徳島で、西洋の名画を見ることができて感激しました」、

「観たかった印象派の絵を観ることができました」というアンケートが多くあった他、「神戸の美術館に負けないように、これからも名画展をどんどん開いてください」と声をかけてくださるお客さまもいました。その方は、関西で開催されている規模の大きな企画展に足をほこぶ熱心な美術ファンのようです。その一方で、「西洋の古い絵は難しい」という人もいますので、感想は多彩といえるでしょう。

私も小学校の団体見学の案内役を行いましたので、ここでは、そのようなも含めて紹介したいと思います。

### 子どもには難しい?

学校の先生のなかには、「徳島ではなかなか見られない名画を子どもたちに見せてあげたい」といつて、団体鑑賞を申し込んでくださる方、他、「子どもたちには分からないのでは・・・」と尻込みされる先生もいます。読者の皆さんは、それをどう思いますか。「現代の美術ではなく、西洋名画が分からない?」と首をかしげる方もいるのではないのでしょうか。しかし、よく考えてみると、世代によって、西洋美術に対

する感じ方は少し異なる面もあるようです。

今日の日本では、「西洋名画」に描かれた物語や人物、表現スタイルの変遷について情報があふれています。テレビの美術番組で解説を聞くこともできますし、本屋さんに行けば、専門書からガイドブックまで、数多くの書籍が並んでいます。知識ゼロから学べるように、やさしく説明してくれる本も少なくありません。中学校や高校で、美術用語を暗記したテスト勉強のことを思い出す人もいます。

そのような環境があると、「バロックとは何か、ロココとは何か」ということを勉強しなければ・・・」と思ひ、ハードルをつくる人もいます。若い人のなかで、二〇世紀以降の美術を自分の感覚とつなげて楽しむ人が増える一方、古い美術については、知識の必要性が気になる場合があるのも分かるような気がします。

### 楽しむ子どもたち

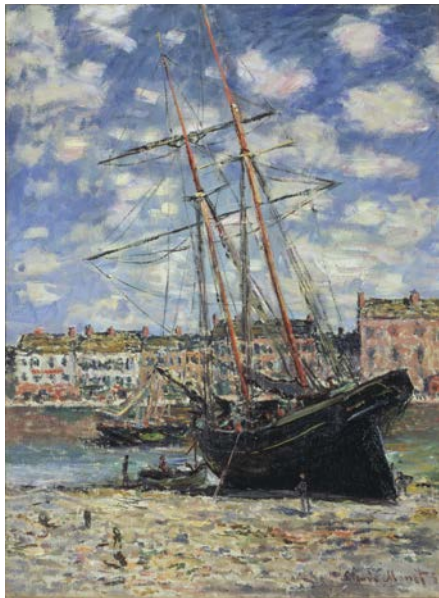
近代美術館では、そのような先生の不安がなくなるよう、遠足で見学にきた子どもたちが楽しめる案内にとめています。年齢に応じて内容は変えるの

ですが、小学校五年生を私が案内したときは、次のような流れですすめました。

「美の饗宴」展は、会場入り口の近くに古い時代の作品が並び、だんだん新しくなるような構成となっています。案内ではまず、最初のコーナーでよく観察する体験をしました。描かれた人の服装や小道具のこと、男の人と女の人の表情や一人が何をしているかに注目し、意見が出るように促すと、子どもたちは、観察想像をする楽しさにすぐ気づいてくれました。肖像作品では、モデルが何歳くらいなのかを考えてから、解説を加えたりもします。

次のコーナーからは、お気に入りの作品を決めた子に、その理由を聞いていきました。ヴェネチアの風景を描いた作品の「和やかな雰囲気」が気に入ったとか、少女と犬を描いた絵では、「犬がかわいい」「犬の毛がリアル」という意見がありました。一人一人の感じ方を尊重し、コーナーごとに観ていくと、無理に聞かなくても感想が出てきます。

時代が新しくなり、印象派のシスレー(牧草地の牛、ルーヴレンヌ(二八七四年))のところでは、「昔の絵は写真みたいで、どのよ



クロード・モネ〈海辺の船〉1881年（「美の饗宴」展）



広島晃甫〈岩上小禽〉1922年（「特集 徳島ゆかりの美術」）

うに描いたのか分からなかったけど、これは点々で描いている。色も明るいです」という感想がありました。他の子も点描を活かした表現や色彩の明るさに気づいてくれました。三〇〇年間の作品を順に観察していきましたので、時代による表現の変化にしっかりと気づいてくれたようです。

人によって好きな作家や分野はあるのですが、西洋美術だけを特別視してはいないのです。それに対して、ある程度以上年配の人になると、「泰西（西洋）名画はすばらしい」という思いがどこかにあるような気がします。

**西洋絵画へのあこがれ**  
いま、若い世代の人たちは、西洋「名画」も日本の古美術や現代美術、マンガなどのサブカルチャーも等価なものとして捉える傾向があるといわれます。

日本は明治末頃から少しずつ大衆的広がりを見せはじめます。最初は、海外から紹介される作品の図版を通して、さらに戦争の時代を挟んで戦後になると、欧米の美術館からやってきた名品にふれて、多くの人が惹きつけられました。「名画展」が繰り返して行われ、一九七四年にルーブル美術館所蔵のレオナルド・ダ・ヴィンチ〈モナリザ〉が東京で公開されたときは、二五

〇万人が来場。多い日で二日六万人が訪れ、長蛇の列も話題となりました。欧米が力強く世界の文化を引っ張っていた時代の話といえるでしょう。

そのような時期を過ごした人は、これまで鑑賞の機会がなかったとしても、西洋美術に対する憧れや「二度見てみたい」という気持ちの心のどこかに育んでいるように思われます。

今回の展覧会で、八〇歳代を中心とする高齢者のグループを案内したとき、「すばらしかった」「二度観てみたい」と思っていたので感激した」という声を聞きました。そのとき私は、お客さまの心の奥に刻まれている言葉にならない気持ちに寄り添うのも大事なのだと思いました。

## 多様な楽しみ方

しかし、西洋名画をめぐる状況は、時代によって変化しています。戦後すぐの時代に比べると、いまでは格段に多くの人が海外に出かけており、フランスのルーブル美術館、イギリスの大英博物館など著名な館はいうまでもなく、いろいろな街の美術館を訪れて楽しむ人は少なくありません。先に触れたように、東京や関西などの大都市で開かれる西洋名画の展覧会に出かける人もいます。そのような熱心な鑑賞者を含め、多様な来館者を迎えているのが今日の名品展といえるでしょう。

いずれにしても地方美術館では、西洋絵画の歴史をたどる展覧会を含め、さまざまな展覧会が開かれなくてはならないのだと思います。「二度観てみたかった」と考えていた人の願いに沿うことができ、「美術鑑賞は子どもには難しい」と思う人が、鑑賞を楽しむ子どもの姿を知ることができるのも大切です。

思い出話となりつつあるのですが、開館以来、

当館コレクションのピカソなどの作品鑑賞は「子どもには難しい」という意見がずいぶんありました。近年はそのような意見が減ったのを感じ深く思うのですが、それは来館者の美術に対する捉え方が多様化し、変化していることの表れだともいえます。では、それを踏まえて次の時代の美術館はどうあるべきなのでしょう。考える時期がきているのかもしれない。

徳島県立近代美術館では、六月二日まで「美の饗宴」展と「特集 徳島ゆかりの美術」を開催。二三日には「特集 現代版画」がはじまります。

## 6月の催し

■東京富士美術館 所蔵美の饗宴 西洋絵画の300年―バロック、ロココからエコール・パリまで― 21日〔日〕

・学芸員による展示解説 14日〔日〕午後2時〜、講師…吉原美恵子（当館学芸員）、場所…展覧会場。

・子ども鑑賞クラブ 6日〔土〕午後2時〜、対象…小学生、場所…展覧会場。

■所蔵作品展2015「特集 徳島ゆかりの美術」21日〔日〕まで

「特集 現代版画」23日〔火〕から